

(1) 淺草寺觀音堂東南面。

淺草寺本堂修理工事に就て

淺草寺營繕局主任技師 小林 福太郎

淺草寺觀音堂修理工事は、起工以來滿四ヶ年にして竣功、三月十七日落慶遷座報告式を舉行し、四月一日から開帳の盛儀が執り行はれることになつた。次に本工事の設計並に工事經過の概要を述べて見よう。

設計の概要

建物解体 當觀音堂は慶安二年即ち今より二百八十餘年前の建築であつて、その後屢々修理工事が行はれたのであつたが、恐らく、今回の修理工事がその最も大規模にして徹底的なものであると斷言し得ると信ずる。それ

は、建物の大部分殆ど全部を解体して工事を行ふといふ一事のみを以て十分に知り得らるゝのである、この建物解体を行つて徹底的に完全なる修理を加へることが今回の工事の根本方針であると共に、一面、この重大なる解体を要するほど、建物損傷の程度がはげしかつたことが知らるゝのである、殊に建物全体の傾斜、軒部構造の破壊などはその最たるものであつた。

解体後の組立 一旦解体された建物の部材には、一々修繕補強の方法が加へられ、再用に耐へざるものは新材を以て取替へ、然して



(2) 淺草寺觀音堂正面西部。

更に之を原形の通り建て固めるのである。その構架の方法、工作の手法等に至ては、建物將來の保存上、慎重なる考慮研究を費し、改善有利の案が講ぜられたのは云ふまでもない。

屋根瓦葺替 次には屋根瓦を全部新規のものに改め葺替へをする案である。

舊屋根瓦は俗に地瓦と稱する甚だ下等のもので、破損せるものも少なくない、其葺方も多量の葺土を用いた極めて不完全なものであつた、而もその形式に至つては、全く破格醜狀を極め、建物全體の優秀なるに比し甚だ不似

合のものであつた。これは中古の亂暴なる修繕によつて改悪せられたものであらう。即ち、屋根瓦新造と共に形式の改善も同時に行はれたのである。

漆塗替 屋根瓦の葺替と共に漆塗工事は本工事中の重要なものである。最近の漆塗替へは明治三十三年に施行せられたのであるが、其工法は最善のものとは云ひ難い、無論、龜裂や剝落の度は頗る多大で、甚だ醜い觀を呈してゐたのみならず、斗拱以上、軒部全體へかけては、舊い漆塗の表面へ辨柄朱だけ



(3) 草 寺 観 音 堂 正 面 東 部。

を塗抹したのに過ぎなかつた。今回の漆塗は建物全體に互つて施工せられ、且、舊漆塗の部分はすべて下地から「叩き落し」を加へ、建築塗料としての漆の、實質的效果を發揮せしむべく、無駄な工程を省いて施行したのである。

石工事、建具彩色、彫刻、金具、其他 石工、建具、彩色、彫刻、金具等の各工事に就ても、それぞれ最善周到の用意の下に修理が行はれたのである。

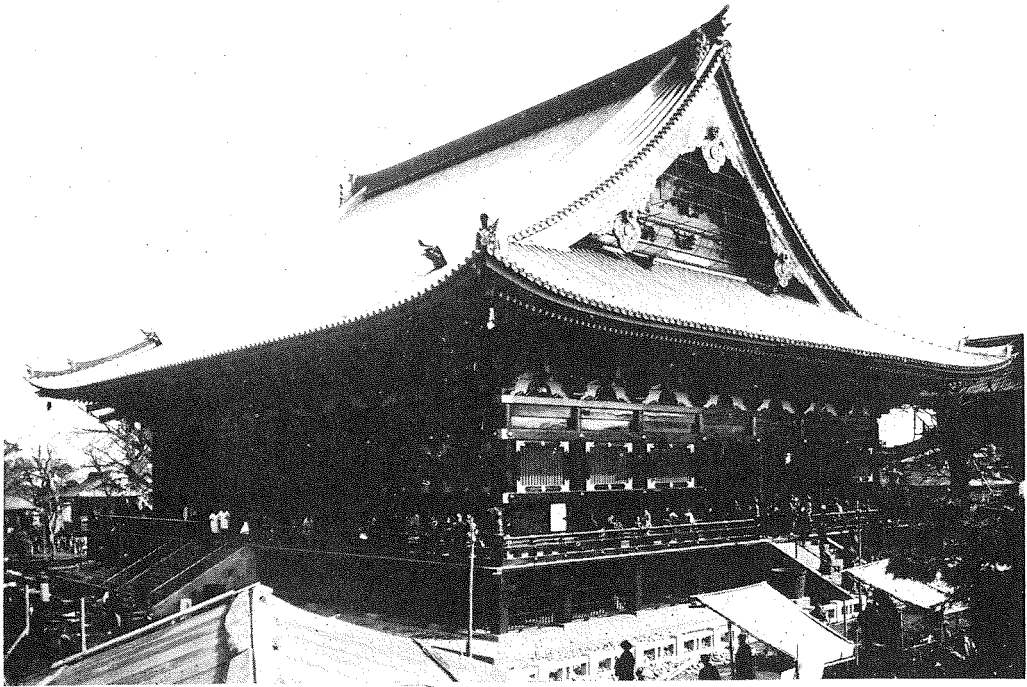
以上で淺草寺観音堂の修理工事の一般方針

がいかに徹底的完全を期せるものであるか知られるであらう。以下、この方針に従つて施行せられた工事經過の概要を記述する。

工事經過の大要

昭和四年 工事開始は昭和四年四月、その年一ばいは、殆ど其全部を扨大な上家足代の建設を中心として、工作小屋、材料置場、監督員詰所等の假設物、舊屋根瓦の取下しなどに費した。

就中、上家足代は方約三十間、棟高二十間、



(4) 淺草寺觀音堂西北面。

假設物とは云ひでう何しろ十八間四方の觀音堂を其まゝ包んで、猶、工事施行の爲周圍に相當の餘裕あらしめ且、内部には一本の柱さへ建てるのをゆるさない、所謂「持ちハナシ」の構造で、完成までには多大の日子と工手間を要したのである。

則ち、昭和四年は總て假設工事に終始して、實際の修理工事には及ばなかつたのである。

昭和五年 昭和五年は一月早々から、いよいよ本筋の工事に入つた。建物解體は先づ廻縁からはじめられ、屋根野地、破風、妻飾、小屋組、軒廻り、斗組と順々に進み、天井も、床も、造作ものも、取解かれて、それぞれ一定の場所へ片付けられた。さしも大きな觀音の御堂は、殆ど柱と貫とその他僅かな構架だけのものとなつた。

柱は總數五十八本（丸柱直徑二尺二寸乃至二尺三寸）その外に向拜柱（二尺角）が四本、丸柱は全部、薦方の手によつて礎石から二尺餘りもウカシ揚げられた、その中で隅柱四本

だけは新材で取替へるために取除かれた。總ての柱や束の根もとには一本毎に厚さ七八寸乃至一尺五六寸の頑丈な敷盤が入れられた。この仕事は柱根繼の一方法で、同時に各柱は正しく垂直に建固められるのである。この敷盤工事が済んで、柱全部の建固めと、新規隅柱四本の取替とが完了したのは十一月下旬であつた。それと前後して床組の修理補強工事が行はれ、又頭貫、臺輪、斗拱、虹梁などの工作及び架け方に進んだ。年末には、新規取換の向拜柱及び隅尾垂木の下拵へにかゝり、一方十月初旬から建具の修理に着手した。

以上は工作方面であつて、他方面では木材の選定調査の爲に一部の工務課員は東奔西走の有様であつたが、後半年には注文した檜、檜、松等の巨材が續々と工事現場に搬入され、その中の一部には信徒からの寄附にかゝるものもあつた。設計の方では、小屋組殊に軒部構造に就ての案を練り、瓦葺替に關しても其形式の改善案と共に、全國各地から取寄せた

瓦の實物見本に就て各種の試験を加へ比較研究をした、尙、京都、愛知、岐阜等の各瓦竈元の實地視察に營繕局から出かけたのであつた。

木材搬入が多くなり、工事が進歩するにつれて、工事場の狹隘を感じて大に困つてゐるが、恰もよく隣接の淺草小學校假校舎が撤去され、その跡地を借入れることに公園課との交渉が纏まり、八月下旬には工場敷地の擴張をすることができた。十月中旬には其處の一部に製材機が据付られ使用を開始した。

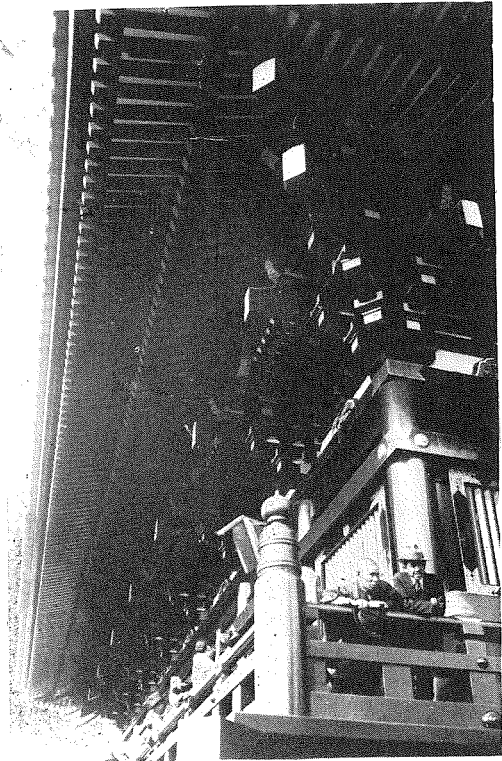
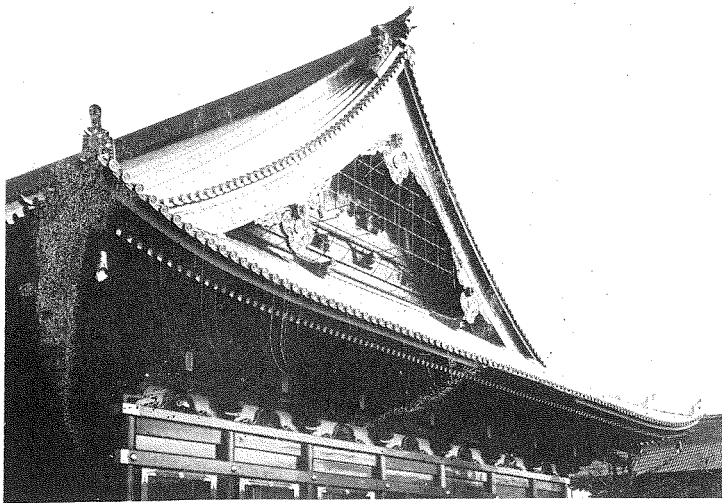
繪畫部は各部見取圖の作成から始めて、壁畫の剝落防止手當、天井繪の修理彩色等の作業に進んだのである。

この年十二月一日、宮内省から本堂修理工事の擧に對して金一千圓御下賜の御沙汰があり、十二月十五日假本堂に於てその奉告式が盛大に執り行はれた。これは本年中で特記すべき事柄であつた。

昭和六年 昭和六年に入つては、床組の構造、斗拱組方、虹梁の新造及架け方等、工事は前年から繼續して進められ、外廻り嵌板に及んだ。向拜柱四本のうち左右の二本は新材を以て取替へられ、中の二本は根繼をして建方を了つた。

木材の搬入は相續いた、小屋組枯木用の松

(6) 淺草寺觀音堂破風

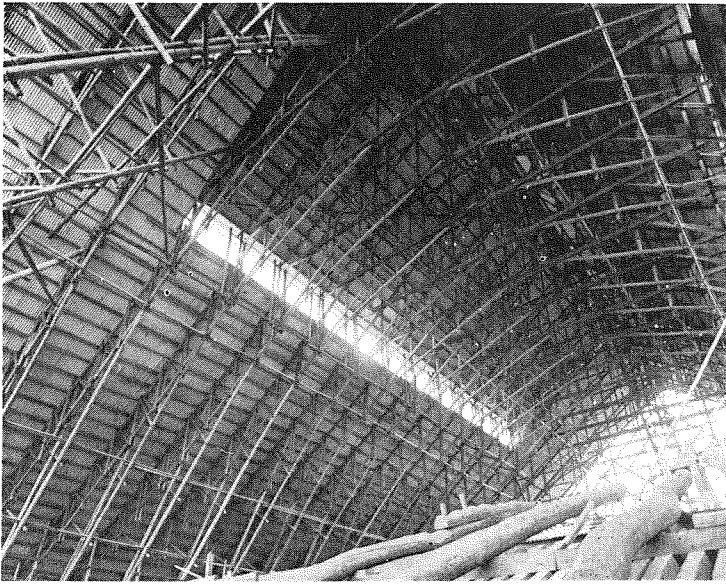


(5) 淺草寺觀音堂西側軒廻り

丸太も二月以來續々と到着し、昨年擴張した廣場も一時は禿、檜、松等の大きな角材や丸太が寸地も剩さず置ならべられた。

側廻り工事の完了に前後して、小屋梁、梁挟み等の新材架け替へ、土居桁の取換や修理が行はれ、一面、軒廻り化粧垂木の架け渡しに進んだ。

八月に入つて、いよいよ當工事の最重要點である軒部構造の改善設計の實施に着手することになつた、この工事に當つては、工事監督員は勿論、大工も、鳶方も、一層の緊張努力を示したのであつた。そして年末の仕事



(7) 淺草觀音堂修理工事足代屋根

納めまでには、軒部から小屋組の大部分、兩方の妻飾りまで組固めが終つたのである。

小屋組工事の進歩に伴つて、一方、屋根材料即ち柿板、葺瓦などに就ても、一月以來種々の手配するところがあつた。土居葺用柿板は、名古屋地方を中心として、數軒から見本と見積書とを徴したが結局、岐阜縣付知町の柿板の山元製造人と直接の契約が成り、價格も廉に、品質も至極良好のものを買入れることを得たのであつた。

新規葺に就ては、既記の如く慎重なる研究と調査とを経て、數回の局議にかけた結果、葺瓦として優良の定評ある京都産瓦、所謂、京瓦を採用するに決し、葺工も本格的本瓦葺に十分の經驗あるものを選んで葺かせることとなり、五月のはじめ指名入札を行ひ、落札者と請負契約が成立した、そして七月には第一回の新造平瓦及び丸瓦の搬入があり、引續き年内に數回の着荷があつた。

漆工事は、既に數回の局議を経て施工方針は確定してゐたのであるが、種々の都合と、他工事との連絡の關係上、主要本工事（建物本體の漆塗）には未だ一切觸れてゐないが、

三月から漆工數名を常備として、内陣の天井格様に簡單な修理を加へ、又、七月からは、建具職の手をはなれた唐戸七十二枚の漆塗に着手した。これは、木部の修繕が豫想以上に新材の補足を要し、建具工の手間も多くかゝつた、自然漆塗も豫定の修繕程度を超えて、全く新規の塗を施すと同様の事となつた、これは年末までに殆ど九分通りが完成した。

彫刻修理は本年の二月から彫刻師三名の手によ

つて、獅子、猿の木鼻、臺股、手挟、大欄間等の缺損部に修理が加へられ、これも年内にその全部が終了した。繪畫部は前年から引續き、畫工も増員し、主として、修理を終つた彫刻物を、豫め作つてあつた見取圖によつて、彩色が加へられて行くのであつた。

昭和七年以後 小屋組は前年度に於て殆んど大部分の組立が出来たので、二月中に土居葺及瓦葺の手配をし、三月には柿葺を始め四月にはいつて柿葺の完了と共に、周圍の足代だけを残して上家を取り拂ひ、瓦葺に着手、九月に葺き終つた。

漆工事は三月に始め昭和八年に至つて完了した。また繪畫彩色の仕事は拳鼻と臺股の殘部及び大欄間彫刻五面とで、他は建物取付の嵌板に畫かれた壁畫及び長押文様の置上極彩色等の修理であるが、漆工事に共に今年三月竣力した。また石工事と飾金具工事は昭和七年度にはいつてはじめて施行した工事であるが、石工事は建物周圍の敷石及び東西北三面の石階の改修で二月末に着工、五月中に竣功した。飾金具は其數夥しきものであるが、全部渡金し直した。(終)